

宮崎県の

施設園芸と特徴

宮崎大学農学部

五味 清

はじめに

宮崎県の沿海地帯は表1, 図1に示したようにえんえん350kmにわたり年平均気温16.7℃以上の温暖地であり, 特に冬季の温暖, 多日照, 快晴日数の多い気候条件に恵まれて, 古くから早出し野菜の特産地として全国に名声を博してきた。

また耕地にも恵まれ, 沿海地帯の田畑面積は4万ha, うち水田面積は全県の59%を占め, 天恵の気候条件と相まって, 水田裏作を主体とした施設園芸の母体となっている。

すなわち, 宮崎県における昭和44年度の施設野菜面積1560haのうち93%が, 宮崎市を中心とした沿海地帯に分布し特徴あるハウス団地を形成している。

1. 生産の動向

県下のハウス栽培面積は, 昭和40年以降急速な

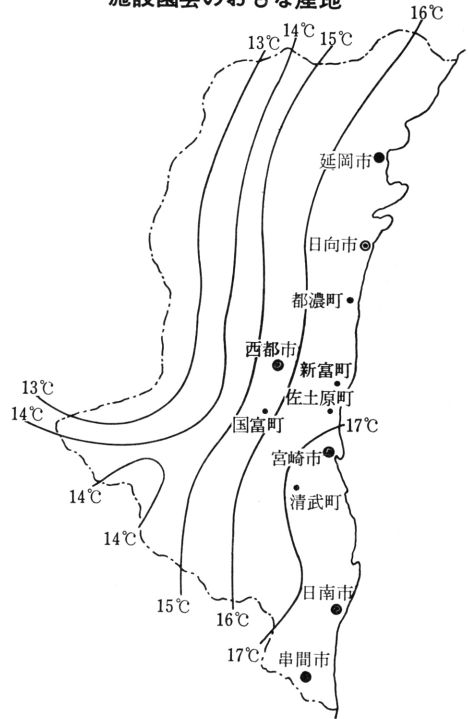
第1表 宮崎、高知の冬季気候条件

項目	地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
快晴日数	宮崎	13	10	9	10	6					8	11	14
	高知	10	7	10	7	5					9	10	12
冬季日照時間	宮崎	191	174	190								188	2,254
	高知	190	179	204								188	2,284
冬季平均気温	宮崎	6.7	7.6	10.7								9.0	16.7
	高知	5.0	7.0	9.2								7.5	15.6

伸展を示しており, 昭和44年度の実績ではカボチャ(半促成, 抑制)865ha, キュウリ(促成, ハウス抑制)388ha, トマト(促成)107ha, ピーマン(促成)33haであり, その他にプリンスメロン, ハウススイカが若干含まれている。

宮崎県における特産野菜としてカボチャ, キュウリ, トマト, スイカ, ピーマン, 露地メロン, サトイモ, 食用カンショ, 秋パレイショ, エンドウ, ダイコン切干, ナスの12品目の県外出荷量, 販売金額を年次別に見ると図3のとおりで, 昭和

図1 宮崎県における全年平均気温と施設園芸のおもな産地



44年度には6.7万トン, 63億円に達し, 今後ますます躍進するすう勢にある。

宮崎県では国の総合農政の展開に先立ち, 数年前から, 農政の基本方針として稲作をベースに, 畜産, 野菜, 果樹を基幹作目とした, 積極的な営農振興方式を推進しており, 野菜については, 沿海地帯の施設園芸の集団産地化と規模拡大を最重要項目にあげ, 種々の施策を進めている。

また従来は大消費市場に遠いため, 輸送問題が一つのあい路となっていたが, 本年3月には細島一川崎間, 11月には細島一神戸間に, 6千トン級

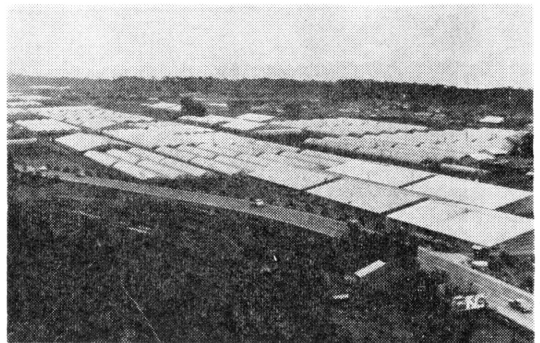
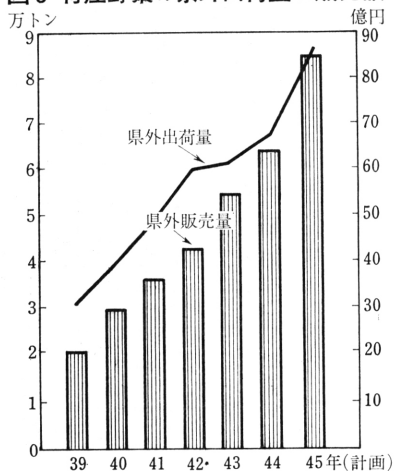


図2 構造改善事業によるハウスの集団産地 (新富町 大持田地区)

のカーフェ
リーが就航
することに
なり、これ
を機会に農
畜産物の海
上輸送が実
現する。
フェリー
1便の農産
物輸送能力
は310トン
で、野菜の
フェリー輸
送体制の確立をはかるため、昭和51年度を目標
に、年次的にフェリーに直結する大型集団産地6
カ所の造成に着手し、ハウス面積新規200ha、既成
拡大410ha計610haの拡大を見込み灌水、加温等の
近代化施設を合せて67億円を投ずる計画である。
これにより県外出荷量は、昭和43年度の3.5倍約23
万トンに達する予定である。
現在の出荷先は、出荷経費の安い京阪神、中国
北九州市場が主体であり、北九州、中国約30%、
京阪神25%、中京、京浜5~6%程度となっているが、フェリー輸送の実現により、京浜市場への
出荷がかなり増加するものと考えられる。

図3 特産野菜の県外出荷量と販売額



2. ハウスの規格と設備

油障子利用の框栽培から始まった宮崎の早出し野菜も、ビニールトンネル、竹幌型ハウスから鉄骨連棟ハウスに発展し、さらにマンモスハウスも見られるようになった。

3. 作型の分化

本県の施設園芸は、一部海岸砂丘地帯を除いて大部分が水田裏作であり、「野菜+米」、「米+

昭和44年のハウス面積3539,000m²のうち鉄骨ハウスは約1505,000m²、パイプハウス270,000m²であり、鉄骨50%、パイプ3.6%、マンモスハウス7%となっている。

今後の傾向としては、鉄骨ハウスとともにパイプハウスの伸びが注目され、一部では中柱に鉄骨を使った折衷式のパイプハウス (APハウス、HPハウスなど) も、かなり普及するものと考えられる。なお県では昭和42年クミアイ標準型の鉄骨ハウスを設定し、全県下に広く普及している。クミアイ1号型は間口16.4m (4連棟) のキュウリ用であり、クミアイ2号型は間口16.8m (3連棟) のトマト用、クミアイ3号型は間口16m屋根型単棟のマンモスハウスで、ピーマン用となっており一棟1,700m²の大型マンモスハウスもある。

またパイプハウスも間口16.4m (4連棟) のものを1号型、間口16.8m (3連棟) のものを2号型として普及している。特に昭和40年以降、施設の近代化として自動灌水施設・温風暖房による加温機の普及をはかり、加温面積はキュウリ60%、トマト28%、ピーマン80%程度と推定され、省力化と規模拡大に役立っており、灌水施設も70%を超えている。なお昭和41年には県内8産地がキュウリ、トマトの指定産地となり、新たに昭和45年には2産地がピーマンの指定産地となった。これらの指定産地ではキュウリを中心に、モミガラクタン利用の共同育苗を普及し、技術の平準化と収量の増大、および品質の向上をはかりながら、共販体制を強く推進している。

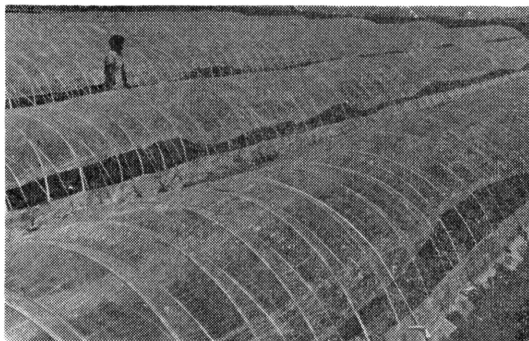


図4 クミアイ1号型鉄骨ハウスによるキュウリ促成栽培 (宮崎市生目地区)



図5 ビニールトンネルによるカボチャ半促成栽培 (宮崎市富吉地区)

野菜」といった複合経営が主体となっている。したがって、水稻の作型の分化に伴って施設野菜の作型も分化してきた。現在の主な作型を種類別に示したのが図6である。

たとえばキュウリの促成栽培は、中期水稻との組み合わせで、10月上中旬に播種され温風暖房機の導入により栽培が増加しており、トマトの促成は早期水稻との組み合わせで

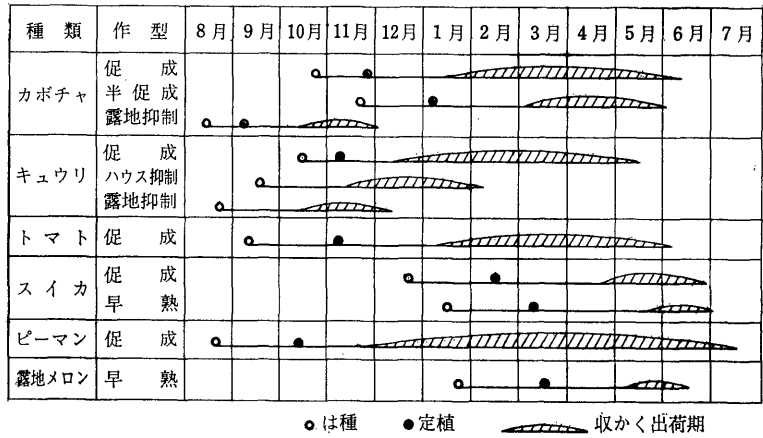
9月上旬に播種され、カボチャの促成半促成は、普通水稻の跡作として、それぞれ10月中下旬、11月下旬に播種される。

また、早期水稻の普及にともない抑制果菜の栽培が増加し、輪栽の面で安定した生産体系が組立てられており、露地抑制キュウリは8月下旬、ハウス抑制キュウリは9月中旬、露地抑制カボチャは8月中旬に播種される。

ハウス抑制キュウリは、水田では跡作にカボチャを導入する2作型が、また畑地帯では、スイカを作付する2作型が分化し、生産量、収益性ともに安定してきた。

これらの作型に使用される主要品種は、カボチャが宮崎早生1号、キュウリが促成、久留米落合

図6 宮崎県における主要野菜の作型



H型、抑制、長日落合2号、トマトは強力五光および東光、スイカが天竜2号、こだま、ピーマンがさががけみどりとなっている。

おわりに

以上のように、宮崎県における施設園芸は、沿海地帯の水田裏作を主体として多彩な作型を形成しており、今後ますます発展するものと考えられるが、そのためには、農家の生産意欲の向上と生産施設の近代化、技術の改善などによる経営規模の拡大とともに、集団産地の育成、生産組織の強化、共販体制の確立などきめ細かい施策が必要であって、今後一層の奮起が望まれる。

転作予定面積は？

～ 作物別、年次別の動向 ～

ことしも、米の作付調整がきびしく進められるが、農林省では、作物別に、年次別に、どの程度の面積の転作を予定しているのだろうか？この線にそってまとめられたのが別表である。

なお、46年度の転作面積15万haは、46年度

の新規転作面積9万7千haに、45年度の転作面積を加えたものである。(ただし、数字は概数を示したものであるから、内訳の計は、必ずしも総計と一致しない。

また、各転作作物の収益性については、9頁に掲載した。

作物別、年次別転作予定面積 (千ha)

区 分	46年	47年	48年	49年	50年
飼料作物	30	34	37	40	44
永年性作物	6	6	6	6	6
大豆等豆類	45	34	34	34	34
野 菜	10	10	10	10	9
そ の 他	6	6	6	6	6
計	97	89	92	95	99
累 計	150	239	331	426	525